

## Casio Terminal Management ログ削除機能の設定手順について

端末管理ソフト Casio Terminal Management において、ログ削除機能の追加に伴う作業手順について記載します。

### 【機能追加項目】

以下の機能を追加いたします。

- ログ削除機能に相当するストアードプロシージャを作成して、データベースに追加します。
- 端末除外機能に相当するストアードプロシージャを作成して、データベースに追加します。
- 上記作成ストアードプロシージャを呼び出すように対応した、サーバーコンソールをリリースします。
- 上記作成ストアードプロシージャを呼び出す、実行コマンドをリリースします。
- 上記リリースコマンドをタスクスケジューラから呼び出す設定をリリースいたします。

### 【リリース物】

以下にリリースするものを記載します。

- 既存モジュール

CTMServerLibrary.dll	サーバーデータベースなどを操作する部品
CTMServerConsole.exe	サーバーコンソール本体
CtmScSubDialog.dll	サーバーコンソール部品
CtmScParts.dll	サーバーコンソール部品
CtmScReport.dll	サーバーコンソール部品
CtmScControl.dll	サーバーコンソール部品
- 新規モジュール

CTMProcedureCommand.exe	ストアードプロシージャを実行するコマンド
CTMProcedureCommand.exe.config	コマンドの定義ファイル
- スクリプト

7_1.CTMCREATEPROC.sql	データベースに追加するストアードプロシージャ
RegistCtmDbProcedure.bat	ストアードプロシージャをデータベースに登録する バッチファイル
DaleteDataByDayInterval.xml	タスクスケジューラのデフォルト定義ファイル
RegistCtmTaskScheduler.bat	定義をタスクスケジューラに登録するバッチファイル
- 資料

ログ削除機能設定手順書	本ファイル
-------------	-------

## 【設定手順】

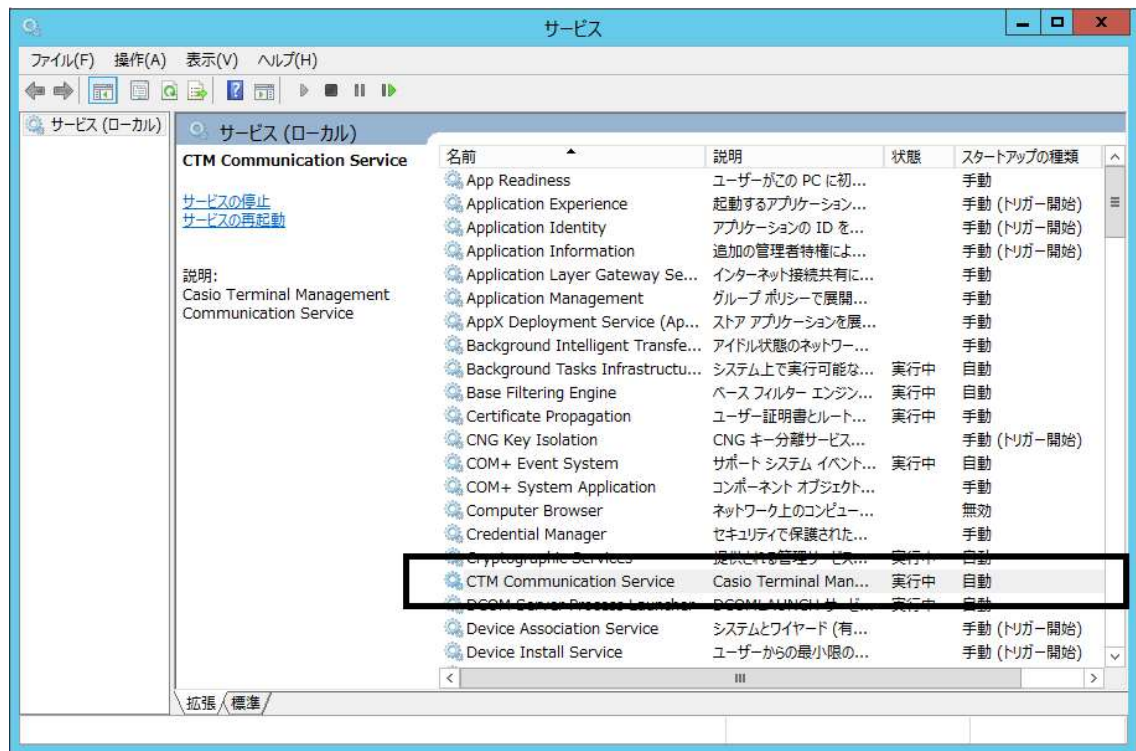
以下にリリース物を設定する手順を記載します。

### ● モジュールの設定

#### 1. サービスの停止

##### CTMcmuSvc サービスの停止

- ・「コントロール パネル」－「すべてのコントロール パネル項目」－「管理ツール」から「サービス」を起動します。



- ・サービスの一覧から「CTM Communication Service」を選択して、右クリックでコンテキストメニューを表示させ、「停止」を選択します。



- ・停止が実行され、サービスが停止します。

#### 2. モジュールの入れ替え

- ・念のため、既存モジュールのバックアップを実行します。

「C:\¥Program Files (x86)\¥CASIO¥CTM」フォルダーを削除されない任意の場所にコピーします。

- ・バックアップが完了したら、既存モジュールと新規モジュールを「C:\¥Program Files (x86)\¥CASIO¥CTM」フォルダー下にコピーします。

#### 3. サービスの起動

- CTMCMuSvc サービスの起動

サービスの一覧から「CTM Communication Service」を選択して、右クリックでコンテキストメニューを表示させ、「開始」を選択します。



開始が実行され、サービスが起動します。

- スクリプトの設定

1. DB スクリプトの実行

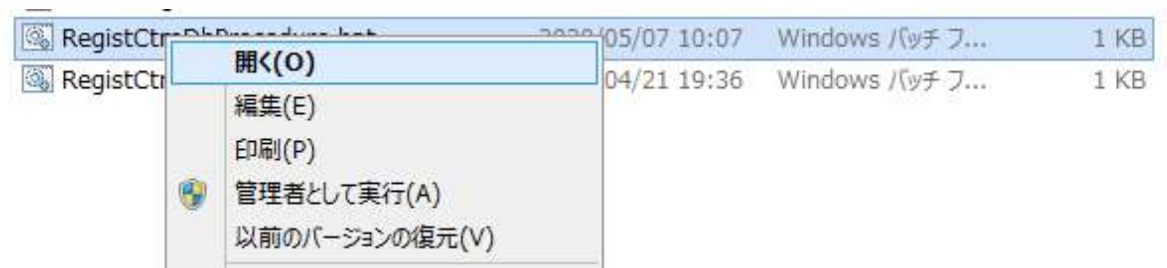
- 「CTMSERVERDB」 インスタンスに「7\_1.CTMCREATEPROC.sql」に記載されたストアプロシージャを登録します。

- 1 つ目の登録する方法は、

「RegistCtmDbProcedure.bat」を notepad で開き、「sa」のパスワードを「\$\$Ctm2015」から環境に合わせて書き換えます。

echo ストアドプロシージャを登録しています。  
sqlcmd -S %COMPUTERNAME%\CTMSERVERDB -U sa -P \$\$Ctm2015 -d CTMDB -i %~dp0¥7\_1.CTMCREATEPROC.sql -o outfile.log

エクスプローラから「RegistCtmDbProcedure.bat」を選択して、右クリックでコンテキストメニューを表示させ、「開く」または「実行」を選択します。



バッチファイルが実行され、ストアプロシージャが登録されます。

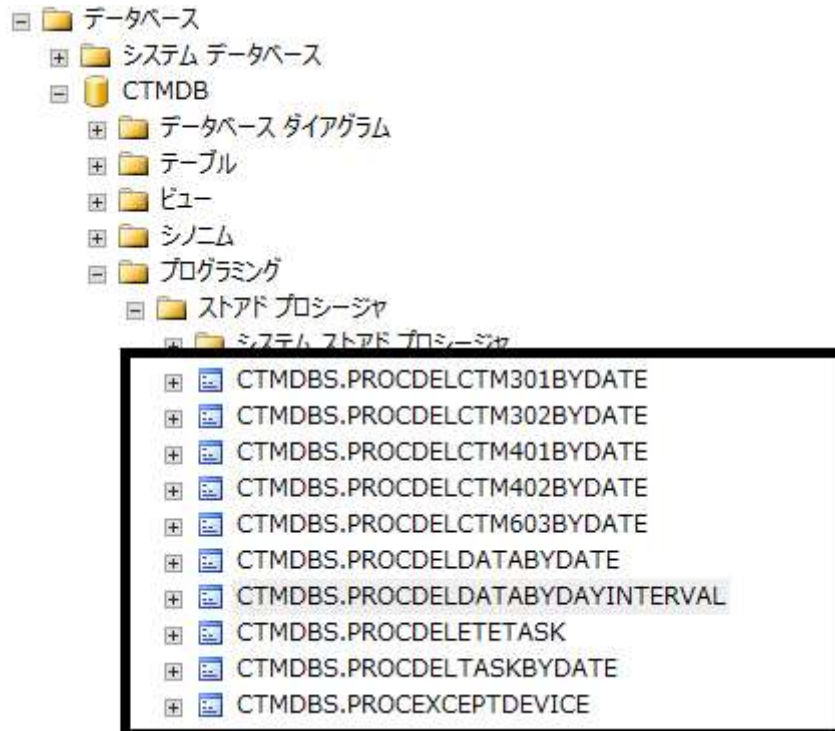
- 2 つ目の登録方法は、

SSMS を使用して、管理者権限 (sa) で「CTMSERVERDB」にログインします。

「7\_1.CTMCREATEPROC.sql」を読み込み、「実行 (X)」を押下して実行します。

「コマンドは正常に完了しました。」が表示されれば、正常に終了しています。

- 登録の確認は、SSMS でログインして、「データベース」－「CTMDB」－「プログラミング」－「ストアプロシージャ」下に「CTMDBS.PROCDELDTABYDAYINTERVAL」が存在していれば、登録が正常にされています。



## 2. タスクスケジューラの登録

- ・タスクスケジューラに「CTMProcedureCommand.exe」を指定時間に実行するタスクを登録します。

エクスプローラから「RegistCtmTaskScheduler.bat」を選択して、右クリックでコンテキストメニューを表示させ、「管理者として実行」を選択します。(必ず管理者で実行すること)

バッチファイルが実行され、タスクスケジューラにタスク「DaleteDataByDayInterval」がCASIO フォルダ下に登録されます。

- ・登録の確認は、「コントロール パネル」－「すべてのコントロール パネル項目」－「管理ツール」から「タスクスケジューラ」を起動します。

「タスクスケジューラ」を起動すると「タスクスケジューラライブラリ」下に「CASIO」フォルダが存在し、そのフォルダを選択すると「DaleteDataByDayInterval」が表示されていれば、登録が正常にされています。



「CASIO」フォルダまたは、「DaleteDataByDayInterval」が存在していない場合は、登録を失敗しています。失敗した場合は、もう一度管理者でバッチファイルを実行してください。

- ・登録の調整をします。

タスクスケジューラのデフォルト定義ファイル「DaleteDataByDayInterval.xml」は、以下の状態で定義されています。

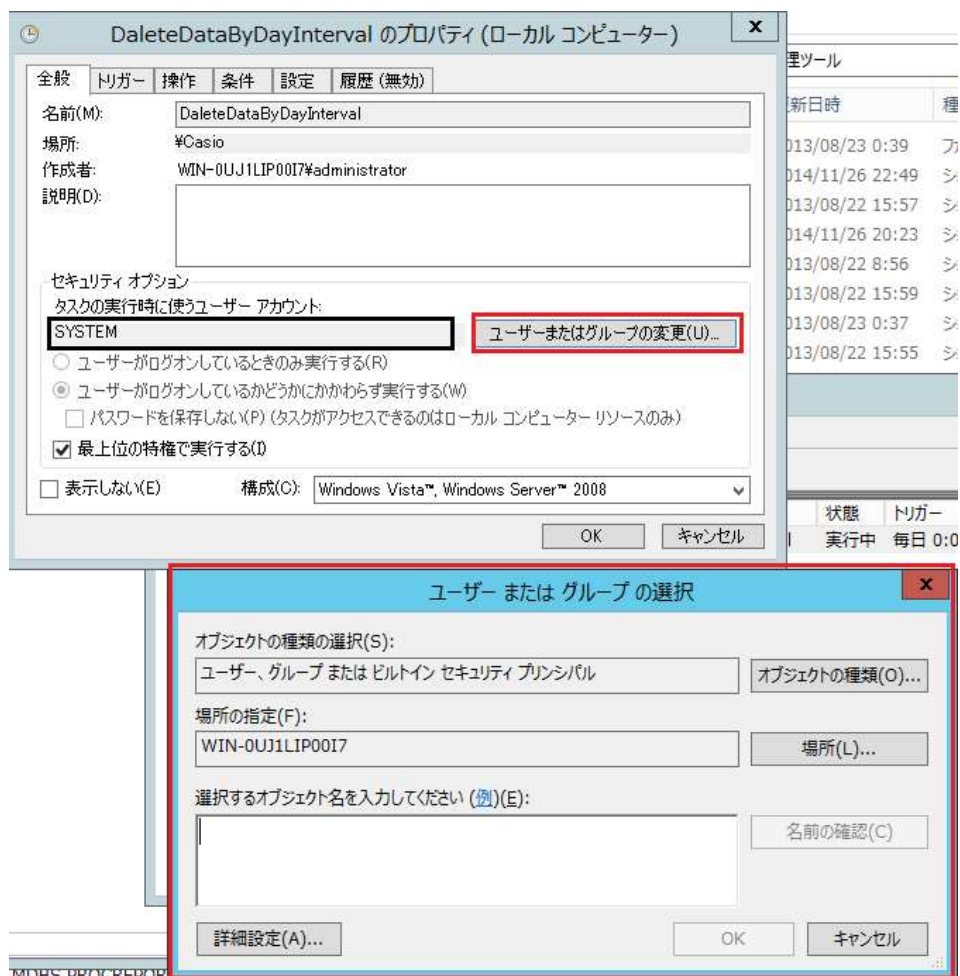
そのため、実行環境に応じて修正を行ってください。

修正は、「DaleteDataByDayInterval」を選択して、右クリックでコンテキストメニューを表示され、プロパティを選択します。

#### A) 実行ユーザーの指定

定義ファイルでは、Windows の「SYSTEM」ユーザーが指定されています。

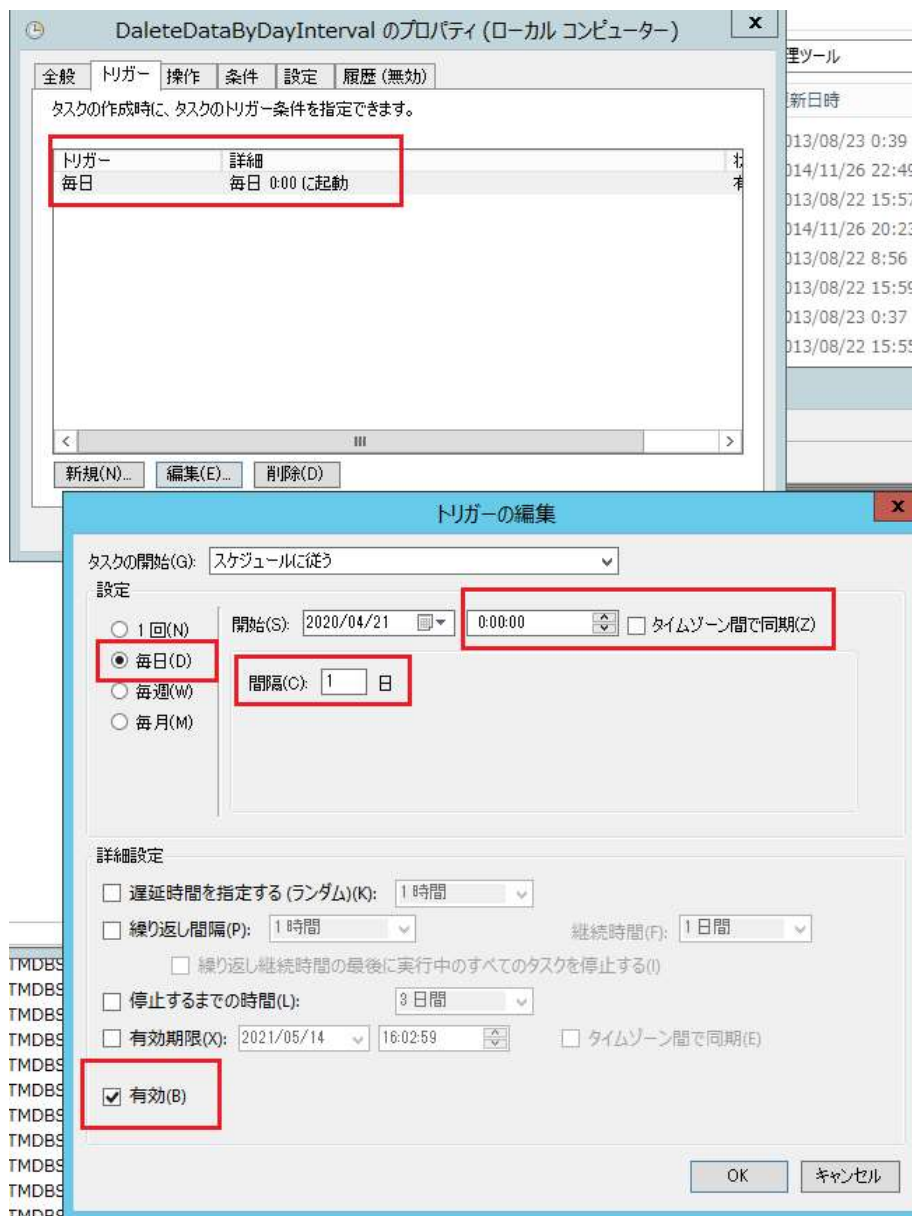
実行環境に登録された Windows ユーザーでタスクを起動したい場合は、ユーザー名とパスワードを登録しなおしてください。



## B) 実行日時の指定

定義ファイルでは、毎日、0時にタスクが起動されるように指定されています。

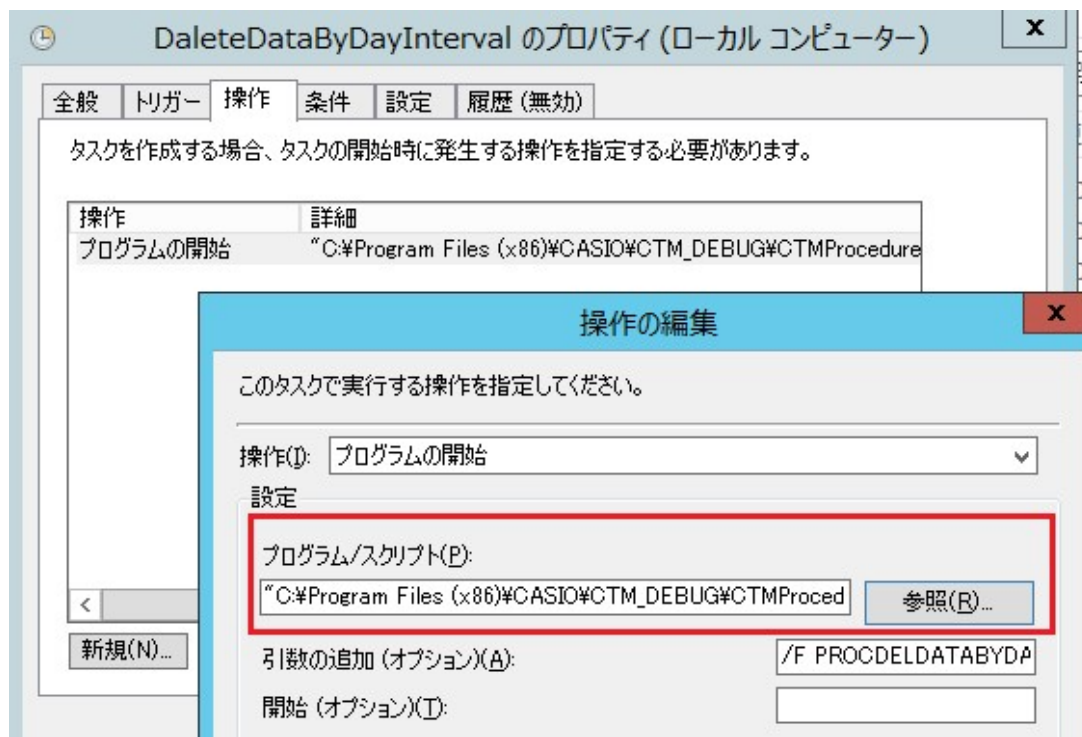
実行環境に合わせて、タスク起動時間を設定しなおしてください。



C) プログラムの指定

定義ファイルでは、実行プログラムのパスを C ドライブ下のパス「C:\Program Files (x86)\CASIO\CTM\_DEBUG\CTMProcedureCommand.exe」で定義しています。

実行環境に合わせて、登録しなおしてください。



以上